



夢を登る (4)

ーガルワール・ヒマラヤ遠征隊ー

帰りのキャラバンは、安堵感からゆったりした気持ちで進む。I氏がガーネットを発見(?)するや日本へのみやげにとばかり皆一様にガーネット捜しに精を出す。今まで高さを求め、熱いまなざしで見上げていた連中が、一変して俗物と化し、ガーネット捜しに下ばかり見ては石を砕いている姿は、何か寄異に感じ、こっけいでもあった。

下山して2日目、雷雨に見舞われる。やはりモンスーンが近い証左であろう。行きはあまりの暑さに日陰を求めていたのに、10日間で秋は急速に深まり、肌寒いほどであった。しかしダクリ峠(2,505m)を境に天気は安定し秋はその前で足踏みしていた。

3日目、峠前のレストハウスに泊まる。ニュー・デリーのハイスクールの生徒達が先生に引率され泊まっていた。上流階級の子弟であろうか、服装もキチンとしている。その傍ら我々のポータ達は、素足で服装もボロで小さくなっている。意味もなくその生徒達が小生意気に思え、腹立たしくなってきた。

ダクリ峠からの展望は、今も思い出の中に消えることなく、秘蔵の風景である。素晴しきヒマラヤの山々に別れを告げ最終キャンプ地までキャラバンは進んでいく。

最終キャンプ地での夜は、楽しく素晴らしい夜であった。羽田から持っていった日本酒に再会し、現地の酒(ロキシ)とともに素晴らしい時を与えてくれた。ポーター達との合唱は夜遅くまで続いた。

10月12日、大勢のポーター達が手を振る中、バスはインドの代表的な避暑地ナイニतालへと向う。バスの中は、昨日の余韻が残っていて修学旅行の様。歌が次から次へと飛び出す。ソエゾンも歌う。「ラブユー東京」が一番気に入ったらしい。(この歌は翌日も大ヒットであった)歌に疲れてきたころナイニतालに着く。その人波に最初に驚く。湖の周りにホテルが林立していた。

夜、街中にドクター達と連れだつて出る。最初に飛びこんだのは、前からの予定通りの一軒しかない中華料理店である。焼きそばの注文。(8ルピー=240円)ペロりと平らげる。街中は行き交う人々でごったがえしていた。酒を手に入れて戻り歌を歌いながらの酒盛りは続く。

13日、一路ニュー・デリーへ。途中の町で何回か休けいを取りながら……。車の数が増え、前方にビルが見えてきた。「ニュー・デリーは、やはり都会なんだなあ!」と変

な所で感心しながら、長い旅を終えインド最後の夜のインベリアホテルに着く。早速、室に入り日本出国以来(22日ぶり)の風呂に入る。なかなか泡が出ず閉口するも、ひさしぶりにサッパリとする。PM7:40よりインド人記者との会見あり。カメラの大半は日本製であった。空腹感と戦いながらも無事終了、ディナー・パーティーへと進む。ビールにて乾杯。大変水っぽいビールであった。

シャンデリアのある豪華な室で食事は進む。場違いの連中が、行義作法などおかまもなくボーイを呼ぶ。「ワンモア」「ワンモア」。素晴しき食欲であった。「ワンモア」で腹がふくれない連中達と、レストランを求めて夜の街へ出かける。人通りは少なく、大勢の人々が外の簡易ベットに寝ていた。暖かい静かな夜であった。

14日、インド最後の日、午前中は市内観光、午後買い物と強行スケジュール。バスガイドは、日本にも留学し、日本語の話せる男性がついていた。ラキシミ・ナライ寺院、大統領官邸、国立博物館、コトブミナルの塔、オールド・デリー市内、レッドフォードとかけ足観光。インドの歴史をかいま見た。それは、仏教文化を破壊したあとに回教文化が続き、ヒンドゥー文化が最後に残った歴史であろう。端的にそれは宗教人口に表われている。仏教10%、回教20%、ヒンドゥー教70%である。時間を充分かけてゆっくり観光したいと思った。

ホテルに着くや、慌ただしく買物をする。出発の時間はせまってきた。バスにて空港に向う。

空港のチェックは厳重であった。ボンベイでのハイジャック事件を初めて知った。飛行機はエンジンを全開し、上昇する。真下に街の灯が見える。素晴しきインドに別れを告げるべく、いつまでも窓



ラキシミ・ナライ寺院前の筆者

に顔を押しつけている私であり、「また来よう」と、自然に独白する私であった。(完) (檜山)